

タイトル:平成 26(2014)年度 教育セミナー(第 10 回)

日時:平成 26 年 9 月 20 日(土)~23 日(火・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

『ポスト・イスラム主義』からトルコ政治を考える

澤江 史子(上智大学)

今回の報告では、イスラム復興と政治の関係について近年、新しく登場してきた「ポスト・イスラム主義」という概念について概説するとともに、トルコにおけるイスラム復興はこの概念によってよりよく理解することができるのか、あるいは逆に、トルコのイスラム復興勢力をめぐる状況に照らしてこの概念をどのように位置づけるべきかを考察した。

トルコにおいて政治領域で活動する主要なイスラム復興勢力は、トルコ研究の文脈ではイスラム主義というカテゴリーで議論されてきた。しかし、他の中東・イスラム地域においてイスラム主義と位置付けられてきた政治的なイスラム復興運動と同列に論じることが困難な特徴がトルコの主要な復興勢力にはある。それはシャリーアの導入や導入範囲の拡大を目指すという、一般的なイスラム主義の定義がトルコの場合には当てはまらないことである。ポスト・イスラム主義という新しく登場した概念がトルコのイスラム復興研究にとって注目されるのは、そのようなイスラム主義とは区別されつつも、全体としてはグローバルなイスラム復興潮流の多様な目的や活動の在り方の中にトルコの復興勢力を位置づけることを可能にする概念ではないかと期待されるからである。

ポスト・イスラム主義は、論者によってニュアンスの違いがあり、学術的に定義が定着するに至っていない。しかし、国家を目的にしたイスラム主義に対して、グローバリズムやネオリベラリズムによって国家権力が相対化されると同時に、国家から個人の自由や権利の領域を守ろうとする政治社会運動が高まっている現在の世界や中東イスラーム諸国の状況の中で形成されてきた、きわめて同時代的なイスラム復興潮流がポスト・イスラム主義だと理解できる。トルコのイスラム復興運動は、国家主義的な世俗主義への反発として発展してきたが、十年来、今度は政権担当側として、ネオリベラリズムに依拠するグローバル経済の中での新興国としての台頭や、国内政軍関係の民主化、クルド問題の解消に向けた諸権利に関する権利意識の向上を導いてきた。しかし同時に、長期政権がもたらした腐敗や権力への執着、グローバルリスク時代の国家権力強化ベクトルなどが相まって、ここ数年は、権威主義的傾向を強めていることも確かである。

中東・イスラーム地域の多くで、多様なイデオロギー勢力と同列に政治アクターとして活動し、責任政党として政権を担ったり、民主的に野党勢力や市民社会勢力と対峙するという、ある程度の民主政治の基礎がある中で活動実績をもつイスラム復興勢力はまだ多くない。しかし、トルコの事例を見る限り、ポスト・イスラム主義は、個別の組織や集団に当てはめるためのカテゴリーではなく、むしろ理念型や、思想運動を基礎づけるイデオロギー潮流としてとらえることが当面、適切ではないかと考えられるのである。